

先進的痴呆ケアおよび介護予防に関する啓蒙、研修事業

主任：水野 裕（高齢者痴呆介護研究・研修大府センター）

DCM (Dementia Care Mapping ; 痴呆ケアマッピング) 法テキストおよび トレーナーパック (指導要綱) 翻訳事業について

水野 裕 (高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)

英国ブラッドフォード大学の許可を得て、DCM マニュアル第7版および基礎コーストレーナーパックの翻訳事業を行なった。日本人が日本で、「パーソン・センタード・ケア(その人を中心とした介護)と DCM 法」の研修が受けられるようにするために、必須の事業であった。後述する翻訳準備会で検討し、最終決定は委員長が行なった。マニュアルといっても、1992年に故トム・キッドウッド教授が第一回の研修会を開催してから、改訂が重ねられ、現在の第7版は約100ページの分量があることに加え、語句の使い方や、意味が彼独特のものが多く、辞書どおり、翻訳しても、本来、彼が意図したものと異なるものや、意味が通じないものも多く、非常に困難であった。さらに、大府センターと、英国ブラッドフォード大学との契約条項の中には、文化圏の影響のために、字句を変更する場合は、いかなる場合も、ドーン・ブロッカー教授に許可を受ける必要があるという一文があり、メールでの意味の確認は当然のこと(私のメールボックスの中にある、DCM関係のやり取りのメールは約1年半で優に200を超えた)、パース(オーストラリア)で上級コースを受講した後や、日本に来日した際には、1回数時間単位のミーティングをもち、意味を確認しあい、理解につとめた。もっとも、理解に時間がかかったのは、パーソン・センタード・ケアの中心的な概念である、Personhood (パーソンフッド) の意味するものやその訳、トムが現在の痴呆はどのように人々に理解され、どのように考えるべきかといった中心的な概念であった。文字通り、一字一句、かみ締めるように、考え、ドーンまたはクレアに聞くといった具合で作業を行なった。どんな質問を投げかけても、その都度、彼らは、「生前、トムはこのように説明してくれた。」という感じで、即答し、答えに窮することはなかった。私にとっては、非常に驚くべきことだったが、おそらく彼らにも、今の私のように、生前のトムに逐一聞きながら、パーソン・センタード・ケアの理念を学んだ時代があったのだと思うと十分理解できることであった。そのような作業や校正を含めるとおそらく私は、マニュアルを30回以上は精読しているだろうし、15年7月から16年の2月上旬にかけて、生活時間(勤務時間ではない!)のほとんどをこの準備にかけざるを得なかった。そこまで時間を費やすと、特に夜更けなど、まるで、トム・キッドウッドが私に語りかけてくるような錯覚を覚えることすらあった。従って、このマニュアル、特に理念について、誤りがあれば、すべて私の責任に属するものであるし、日本人の誰よりも、知っている自負がある。さらにどの部分についても、質問を受ければ、その語句の意味する点、それに関して、ドーンやクレアはどう説明してくれたかを即答する自信がある。私は決して自信家ではないが、どなたでも私がこの事業にかけた労力を知るならば、理解していただけたらと思うし、私と同じ努力をしてみれば、同じような自信をもつだろう。

以上は、マニュアルの翻訳であるが、ここまでで、ほぼ半年が経過してしまった。しかし、研修のためには、マニュアル本体の倍の分量はあろうかというトレーナーパックの翻訳および準備が残っていた。研修が支障なく行なわれるためには、5日間分のスライド、さまざまな配布資料を翻訳する必要がある、そのために、私はそのすべてを理解する必要があった。スライドを日本語に置き換えて、講義は講師にお願いすればよいということでは研修は成り立たなかつただろうし、研修生の理解は進まなかつただろう。私は事前にすべてのスライド、配布資料、演習の内容を渡されていたが、それらを、初めて目にする日本人にわかるような日本語にするためには、まず私自身がすべてを理解する必要があった。基礎・上級ユーザーの資格は持っていたが、教える側に立って、すべてを理解するのは相当大変である。彼らの研修に、講師補助（**apprentice trainer**）として、つきながら、なおもスライドの日本語や、説明をよりよい表現にすることに苦心した。紙面の関係もあり、詳述できないが、基礎・上級の受講者として参加していたときは、知る由もなかつたが、いろいろな演習の背景にある、パーソン・センタード・ケアを理解するためのメッセージを知るとあらためて、パーソン・センタード・ケアと DCM 法の奥の深さを感じた。

なお、マニュアルの著作権は、英国ブラッドフォード大学に属し、その日本語の翻訳に関する著作権は、大府センターに属する。したがって、日本語の翻訳を入手したい方は、大府センターで主催する DCM コースに参加いただくほかはない。たとえ、海外で受講歴のある日本人であっても、入手することはかなわない。これは、英国本部の見解であり、海外での扱いも同様であるという。

最後になったが、翻訳は、(株)国際交流センターおよび、中川経子氏の協力なしでは、成立していなかつたし、特に、中川経子氏には、果たして翻訳が終わるのだろうかという不安やプレッシャーに押しつぶされそうな私を常に明るい笑顔でサポートしていただいた。この場を借りて感謝したい。

DCM 翻訳準備会

委員：高橋誠一・日比野千恵子・水野 裕(委員長)

協力者：中川経子、

(株) 国際交流センター

平成 15 年 7 月 23 日より、11 月 20 日まで計 9 回開催（詳細別表）した。素訳を中川氏がチェックし、再度水野が英文と照らし合わせて、DCM の趣旨、日本の医療介護看護現場に合うように、言葉を変え、1 文 1 文、委員長が読み上げながら他の 2 委員とともに検討する方法をとった。最終的な語句の選定、チェックは委員長の責任で行なった。文化的背景の違いから訳を代えるときや、当方の解釈を、本文に反映する場合はすべて、ブラッドフォード大学および Dawn Brooker 教授の許可が必要であるとの契約に基づいているため、文の意味が理解できない場合等は逐一確認しながら訳したため多大な労力を要した。牛の歩みのような鈍重な方法であったが、着実に、間違いのない歩みであったと信じている。

H15年度DCM翻訳準備会出席者

回	日	時	出席者
1	平成15年7月23日	14:00～16:00	水野 裕(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター) 高橋 誠一(東北福祉大学総合福祉学部) 日比野 千恵子(国立療養所中部病院) 中川 経子(翻訳) 渡辺 智之(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)
2	平成15年8月14日	10:00～16:00	水野 裕(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター) 日比野 千恵子(国立療養所中部病院) 中川 経子(翻訳) 渡辺 智之(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)
3	平成15年8月20日	10:00～19:00	水野 裕(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター) 高橋 誠一(東北福祉大学総合福祉学部) 日比野 千恵子(国立療養所中部病院) 中川 経子(翻訳) 渡辺 智之(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)
4	平成15年8月21日	10:00～18:00	水野 裕(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター) 高橋 誠一(東北福祉大学総合福祉学部) 日比野 千恵子(国立療養所中部病院) 中川 経子(翻訳) 渡辺 智之(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)
5	平成15年8月22日	10:00～16:00	水野 裕(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター) 高橋 誠一(東北福祉大学総合福祉学部) 日比野 千恵子(国立療養所中部病院) 中川 経子(翻訳) 渡辺 智之(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)
6	平成15年9月11日	15:00～17:00	水野 裕(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター) 高橋 誠一(東北福祉大学総合福祉学部) 日比野 千恵子(国立療養所中部病院) 渡辺 智之(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)
7	平成15年10月16日	10:00～16:00	水野 裕(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター) 高橋 誠一(東北福祉大学総合福祉学部) 日比野 千恵子(国立療養所中部病院) 中川 経子(翻訳) 渡辺 智之(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)
8	平成15年11月13日	10:00～16:00	水野 裕(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター) 日比野 千恵子(国立療養所中部病院) 中川 経子(翻訳) 渡辺 智之(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)
9	平成15年11月20日	10:00～16:00	水野 裕(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター) 高橋 誠一(東北福祉大学総合福祉学部) 日比野 千恵子(国立療養所中部病院) 中川 経子(翻訳) 渡辺 智之(高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)

* 開催場所はすべて、大府センター個別指導室

パーソン・センタード・ケア(その人を中心とした介護)と DCM 法 基礎コース開催

水野 裕 (高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)

「パーソン・センタード・ケア(その人を中心とした介護)」の提唱者である、故 Tom Kidwood 教授によって、英国で初めて、Basic course(基礎コース)が開催されたのは、1992年のことである。それから約 12 年後の今年、ついにわが国でも、日本語のテキストを用いた研修が可能となった。日本人がはじめて、現地ブラッドフォードで、基礎コースを受講、資格を取得したのは、2002(平成 14)年 1 月のことであった。夏に、遠藤英俊氏に情報を得、その後、厚生労働省健康増進等事業の補助金の支援を受け、研究班を組織し(主任:水野裕) 3 名の日本人を基礎コースに送り込んだのは、その年の 11 月のことである。その研修を通して、私は、DCM 法は単なる評価法ではなく、介護現場の質の向上を目指す非常に実践的かつ教育的なツールであることを理解した。試験に合格した余韻覚めやらぬ午後、ドーン氏と会い、14 年度は、一般介護者および、痴呆介護指導者への啓蒙を図ること、そして 15 年度には、日本で、研修会を行えるようにするという私案を提案したのであった。その後、翻訳事業の項で述べたような多大な労力をかけて、大府センターが、約 100 ページのテキスト(一般販売はしていません)、配布資料、講義用スライド、試験等すべてを、高齢者痴呆介護研究・研修大府センターの責任の下、翻訳を行い、研修が可能となった。

しかし、講師については、ブラッドフォード大学で認められた認定トレーナー以外は、研修を行なうことが許されていないため、英国ブラッドフォード大学より、Dawn Brooker 教授、Paul Edwards 氏、Claire Surr 氏の認定トレーナーを招き、通訳(中川経子氏、平野加奈江氏)の協力のもと、研修を行なった。Tom Kidwood 教授は、98 年に他界しているが、今回来日した 3 名とも、直接、教授の指導を受け、研究・研修を引き継いでいる方たちのため、パーソン・センタード・ケアの理念を最もよく理解している人たちと言えるだろう。

認定トレーナーになるための道のりは簡単ではなく、ベーシック(基礎)コース、アドバンスド(上級)コースを受講、試験をパスした後、エバリュエーター(評価者)の資格を取得して、初めて、トレーナーになるための研修を受けられる。これらの研修は、ブラッドフォード大学が、各国に 1 ヶ所のみ、公式パートナー(ストラテジックパートナー)として認めた機関のみで、運営が許されている。日本では、高齢者痴呆介護研究・研修大府センターが唯一の認定機関であり、ドイツ・アメリカ・スイス・オーストラリア等でも同様のしくみである。さらにそれぞれの国には、ストラテジックリードと呼ばれる、ブラッドフォード大学によって認定された、各国のリーダーがおり、彼らがその国の研究および研修すべての計画・運営をリードする責任を持っている。そして、各国の痴呆介護の状況、研究や研修の進行状況について、情報交換をするために、年 1 回各国のリーダーが集まっ

て総会が開かれ、パーソン・センタード・ケアについての話し合いが持たれるのである。

現在、エバリュエーター（評価者）の資格を持つ日本人は、日比野千恵子（国立療養所中部病院）と水野 裕（高齢者痴呆介護研究・研修大府センター）の 2 名のみであり、両名が、今回の研修中、認定トレーナーになるための、講師実習を平行して行なった。認定トレーナーになるためには、最低 4 回の講師実習を行なう必要があるが、来年の春か秋頃には、日本人初の認定トレーナーを誕生させたいと思っている。

そうならば、大府センターが目指している、日本人の認定トレーナーによる、日本語のテキスト、スライド、配布資料を用いた研修が可能になるのである。現時点でも、我々のセンターで、DCM 基礎ユーザーの資格は付与してよいことにはなっているが、ブラッドフォード大学の管理の下に受講生の指導、理解度の評価、試験の採点を行なっている現状がある。近い将来はそれらも含めて、大府センターで運営することが可能となるだろう。なお、資料として、2002（平成 14）年 11 月にブラッドフォードで、基礎コースを受講し、資格を得た際に頂いた、私の修了証（certification）と今回、大府センターで発行した、第一号の修了証（五十音順の先頭）を添付した。日本語版も日本語で書かれているということのみが、異なるだけで、世界 7 カ国の資格と全く同等である。蛇足ながら、署名は各国のストラテジックリードが責任者として署名することとなっており、水野が署名した。このあたりは、日本風に考えれば、なんでも施設長ということになるのに対して、実際の責任者がするところが、興味深い。日本風に、形式的にストラテジックリードを施設長とし、実務は担当者という 2 重構造はありえないようであった。

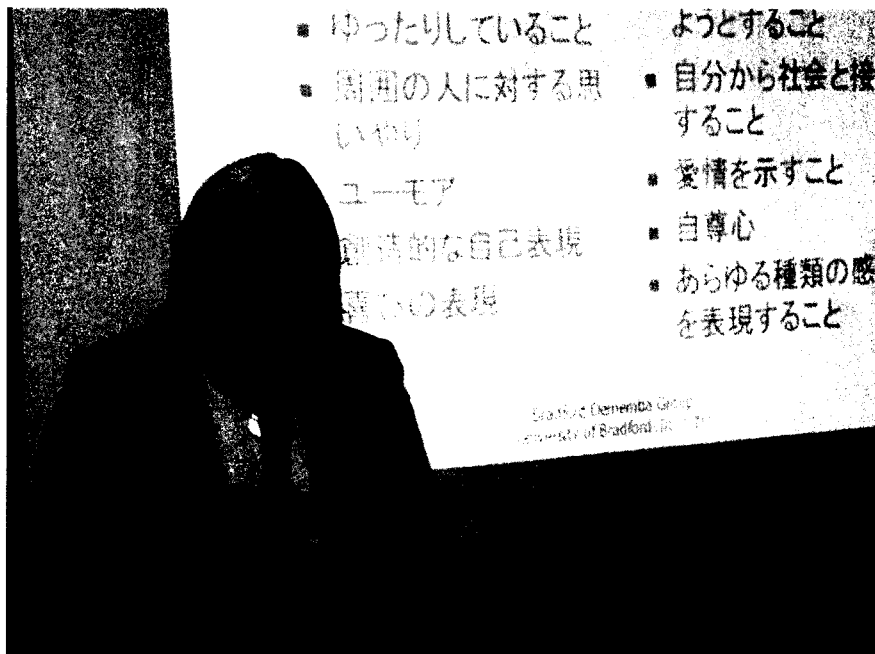
最後に、今回の研修を終え、最終日の試験に見事合格し、資格を取得した方々の氏名、都道府県名、写真を本人の文書による承諾のもとに、ここに掲載させていただきます。

Strategic lead, Japan 水野 裕

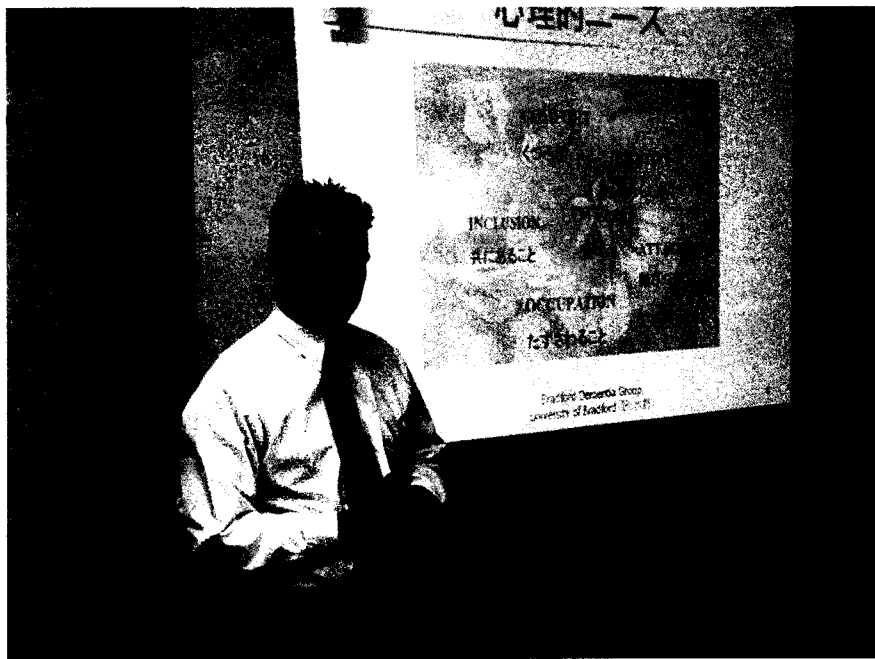
(Strategic Partner, Japan 高齢者痴呆介護研究・研修大府センター)



開講の挨拶



Dawn Brooker 教授



Paul Edwards 先生



Claire Surr 先生



演習に取り組む受講生



演習指導中
日比野千恵子 氏(中央)



通訳のお二方
(左:中川経子氏、右:平野加奈江氏)



お疲れ様でした



第一回 DCM 基礎ユーザーレベル 資格取得者



第二回 DCM 基礎ユーザーレベル 資格取得者

第1回DCM基礎ユーザー
レベル資格取得者

氏名	県名
浅井 紫	愛知県
石川 友理恵	茨城県
伊藤 妙	三重県
上田 宜子	滋賀県
岡本 啓介	千葉県
小倉 久美子	茨城県
可知 昭江	愛知県
小林 達子	鳥取県
佐久間 尚実	千葉県
下山 久之	千葉県
杉浦 博子	愛知県
田中 幸子	福島県
田中 とも江	東京都
永田 寿子	鳥取県
中村 千枝	山口県
中村 春美	三重県
藤井 きよみ	福井県
藤澤 道子	愛知県
南 博子	大阪府
八木澤 良子	広島県

第2回DCM基礎ユーザー
レベル資格取得者

氏名	県名
宇野 聖子	愛知県
大久保 幸積	北海道
小川 真寛	広島県
奥宮 さだ子	静岡県
加瀬 文子	京都府
金山 まゆみ	愛知県
木野 美恵子	岐阜県
小林 厚子	愛媛県
坂本 涼子	三重県
関口 清貴	群馬県
谷本 政美	北海道
中城 有喜	愛媛県
中西 誠司	兵庫県
村越 弥生	高知県
村田 康子	東京都
山本 恵子	高知県
湯浅 美千代	東京都
横尾 恵美子	神奈川県

地域在住高齢者のための「回想法を用いた介護予防」研修事業

遠藤 英俊（国立療養所中部病院）

事業目的

2000年4月に介護保険が導入され、現在見直しがなされようとしている中で、痴呆症の予防医療や介護予防の重要性が増している。しかし痴呆症の介護予防のノウハウについて確立されたものはなく、手探りの状態であった。2000年当時から我々は介護予防の標準化をはかり、その効果を実証し、その方法の普及をはかることを目的にいくつかの研究事業を行ってきた。介護予防とは介護を必要としないように、寝たきりや痴呆症にならないように努力すること、また要介護状態になった場合に進行しないように、また残存機能維持のために、ケアやリハビリテーションを継続的に行うことである。

痴呆症の介護予防を考える上で、音楽療法やアートセラピーなど多種多様な取り組みがなされてきたが、これまで認知機能など痴呆症に特化したデータは十分ではなかった。その中で我々は数年来、回想法に関する研究事業を行ってきた。すなわち回想法を用いた介護予防の方法とその成果のエビデンスを求めてきたところ、健康高齢者に対して、また痴呆性高齢者に対して有用性がいくつか蓄積され、市町村において「介護予防事業」として普及をはかることができるまでになってきたため、今回本研修会を企画した。

事業概要

研修は下記のスケジュールで実施された。募集は厚生労働省計画課を通じて、全国市町村の介護予防担当者にむけて行われ、最終的には109名の参加を得て実施された。

プログラム

2月6日（金）午後（希望者のみ）

師勝町回想法センター，歴史民俗資料館見学（無料：自由）

<http://www.town.shikatsu.aichi.jp/>

2月7日（土）「回想法を用いた介護予防プログラム」

9:00 開場・受付

9:30～10:30 ①痴呆症と介護予防（遠藤英俊：国立療養所中部病院内科医長）

10:30～11:30 ②回想法についてよく学ぼう！

（野村豊子：岩手県立大学社会福祉学部教授）

11:30～12:30 ③回想法プログラムの実際【実技】

（来島修志：日本福祉大学高浜専門学校講師）

昼食休憩（1F、研修室など）

13:30～14:30 ④回想法プログラムの紹介と計画立案の方法（来島修志）

14:30～15:30 ⑤評価スケールと事業効果検証の方法（遠藤英俊）

閉会

事業結果

本事業により回想法の定義、介護予防との係わり、方法、評価について研修を行った。事業成果としては作成したテキストを参照されたい。以下に回想法の紹介、効果について記述する。

人生と回想

岩手県立大学社会福祉学部 野村豊子

人生は過去の体験や出来事が縦糸や横糸となって織り成される 1 枚の織物のようなものです。無数の織り目には、楽しさや嬉しさと同時に、つらさや悲しみも込められており、それには 1 枚として同じ物はありません。

人は一瞬一瞬、生の営みを積み重ねて、その人らしいかけがえのない歴史を作っていきます。そして、自分の歴史のさまざまな時点で、ふと立ち止まり、過ぎ去った昔の出来事や出会った人々の姿、訪れた村や町、山・川・森の自然の移ろい、聴き覚えのある声や歌、舌鼓を打って味わった食べ物などを数限りなく思い浮かべます。懐かしさがこみあげ、楽しいざわめきや情景とともに、生きてきたこと、また人に助けられてきたことなどに思いをはせ、多くの場面が走馬燈のように駆け巡ります。この過ぎ去った思い出を回想する行為は、ごく小さい頃から見られます。しかし、特に年を重ね、高齢になるにつれて頻度が増すともいわれています。

ところで、一般的に高齢者の回想は、社会的に名をはせた人の回顧録は別にして、昔の繰り言とか幼児返りなどと評され、否定的な意味合いにとられる傾向が強くありました。日本では口述史や昔話りの蓄積は、伝統的に尊重されていますが、それでも高齢者が日常生活の中で語る過去の回想は、重視されていたとは言い難いものがあります。高齢者の回想が積極的な意味をもつと提唱され始めた時は、それほど昔に遡ってのことではありません。欧米の回想に関する文献を検討すると、数々の成果は小半世紀以前からありますが総合的かつ示唆的なものとしては、1950 年代から 60 年代にかけて、アメリカの精神科医ロバート・バトラーの一連の業績でしょう。バトラーは、高齢者の回想や回想行為には、人生をふり返り、現在を、また将来を生きるために積極的な意味があると提唱しました。そして過去への回想は“ボケ”の始まりを表すサインではないことを示しました。バトラーの回想の提唱とは別に、日本では戦前・戦後を生き抜いて現在を築いてきた高齢者の方々のかけがえのない個人史を、その方々自身の声から伺い、社会的な財産として残そうとする期待が高まってきました。そのような戦前・戦後史の生きた証拠としての回想と、生命・生活の質 (Q・O・L) を高め、ある時には治療的にも意味を持つとされる、バトラーの流れを汲む回想法の接点は、私どもの周囲の高齢者の回想や思い出語りを伺えば、そのいたるところに見出すことができます。

次に、回想することの意義としては、以下のようなものが上げられています。

- ①歳を重ねていくときに、辛い、厳しい、困難な、といった未だに解決されていない過去が思い出されることがあります。人生を振り返る際に、やり残している課題に圧倒されるのではなく、今までの生き方に根づきながらその人生を統合させていくことを促します。
- ②高齢者の体験する変化は、健康面、知的機能、社会的役割、経済力、対人交流など多岐にわたります。そのすべてが喪失や否定的体験ではありませんが、新しい状況に直面するとき、その変化にたじろぐこともあります。過去の記憶を想起して聞き手に語ることは、「以前、私はこんなことを体験した」という出来事と同時に、「過去にこんな体験をした私がいて、今、それを話している私はその連続にある」ということを認識する行為ともいえます。回想法は、人の現在と過去の橋渡しを促し、過去を生かしながら今の状況に向かう勇気を育みます。
- ③我が国では、他者の思いを第一とし、自分のいいたいことは後にする、あるいは我慢をするといった奥ゆかしさを美德とする文化を背景に、「私の人生などつまらないもの、聞いて頂くほどのものではない」と語る高齢者も多くおられます。しかし、辿ってきた人生はつまらないものではなく、かけがえのないものであることを回想する過程で見出す方もおられます。
- ④回想を話し合う集まりは、同時代を生きた人との共有の体験談に花を咲かせる時であり、また、一方で豊かな独自の体験をお互いに分かち合うひとときとなります。さらに、歴史の共有や心と心の交流を可能にし、グループ終了時も互いのサポートとなり得る関係に発展することも多くあります。
- ⑤長い歴史の過程で培われてきた高齢者の知識や英知は、若い世代との交流でさらに活かされます。高齢者グループといっても、年齢差が20～30年ある場合も多く、その意味で、年齢の低い高齢者と年長の高齢者との世代間交流もごく自然に行われます。年令の低い高齢者は、自分の父や母の年令ほどの高齢者と体験を交換し、共有します。さらに、世代交流とともに文化的な伝統の伝承もなされます。

図1. 介護予防研修会入り口看板



図2 来島氏回想法実習風景



高齢者痴呆介護研究 ～平成15年度報告書～
平成15年度老人保健健康増進等事業による研究報告書

発行：平成16年3月

編集：社会福祉法人 仁至会

高齢者痴呆介護研究・研修大府センター

〒474-0037 愛知県大府市半月町三丁目 294 番地

TEL (0562) 44-5551 FAX (0562) 44-5831

発行所：社会福祉法人 仁至会

身体障害者通所授産施設 サンサン大府

〒474-0037 愛知県大府市半月町三丁目 287 番地

TEL (0562) 46-6260 FAX (0562) 46-7140